※神戸新聞社の許可を得て掲載しています

神戸新聞（夕刊） 第43489号 2019年（平成31年）3月12日

2019年（平成31年）
3月12日
火曜日

夕刊 神戸新聞

神戸新聞社 〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7 https://www.kobe-np.co.jp 購読のお申し込み 0120・

随想

ハントケ景

寺田 匡宏

毎年、初夏になると、ドイツの書肆（しょし）ズーアカンプのウェブサイトに、その年のハントケの新刊の告知が出る。書店にそれを注文しておくと、秋にそれが届く。そのあとの一冬をハントケさんとともに過ごす、というのがこのところしばらくの習いになった。

ペーター・ハントケは、オーストリア出身のドイツ語の作家。映画監督ヴィム・ヴェンダースの1970年代から80年代の盟友で「まわり道」「ベルリン・天使の詩（うた）」などの作品の脚本で記憶されているかもしれない。

去年届いたのは「木の影たちの壁の前で、夜中に」と題された短文集。彼の書くものには、小説、私エッセーに近い小説、戯曲、詩などいくつかの系列があるが、これは、ジャーナルと呼ばれる風景と心象の記録だ。「辺境からのしるしときざし 2007―2015」と副題がついている。

ハントケの魅力を語ることは難しい。どうして読み続けているのかというと、彼のドイツ語の文とリズムが合ったからとしか言いようのないのだが、それでは、どんな魅力なのかは伝わらない。だが一つ言えるのは、彼の書くことばと、描く風景が心をとらえるものであること。言ってみれば、それはハントケ語とハントケ景だ。

――ヘルシンキ駅のガラスの天井に積もっていた雪。レバノン杉のざわめき。朝の満員バス（そう、人類はまた一夜を生き延びたのだ！）。ニコラ・プッサン。イブン・アラビー。ポプラの上で〈落ちる〉遊びをする鳥たちという「春の画」。はだしで歩く草の上に今年初めて見つけたヒナギクの花。〈そして〉、〈そして〉……

約400ページのこの本の3分の2くらいまで読むうちに、いつしか、季節は冬から春に移り変わってきている。この本を読み終えたころには、また、次のハントケさんの新刊の案内が届くだろう。

（てらだ・まさひろ＝総合地球環境学研究所客員准教授）

『神戸新聞』2019年 3 月 12 日（火）夕刊 1 面